

災害の記憶と人間形成

日時 2014年6月29日(日) 13時30分から

場所 キャンパスプラザ京都 ホール

〒600-8216 京都市下京区西洞院通塩小路下る東塩小路町 939 ※ビックカメラ前、JR 京都駅ビル駐車場西側

(13時00分 受付開始)

13時30分-13時40分 開会
本研究会の趣旨説明

13時40分-14時20分

第一報告者 諏訪清二(兵庫県立松陽高等学校)
防災教育と語り継ぎ
司会 阪本真由美(名古屋大学減災連携研究センター)

14時20分-15時00分

第二報告者 池田華子(天理大学)
方法としての「注意」による「不幸」のケア——「不幸」と災害との繋がりから
司会 岡部美香(大阪大学)

15時00分-15時10分 コーヒー・ブレイク

15時10分-15時50分

第三報告者 小野文生(同志社大学)
水俣病と蘇りの記憶の文化——〈非在のエチカ〉をめぐるいくつかの覚え書き
司会 矢野智司(京都大学)

15時50分-16時30分

第四報告者 山名淳(京都大学)
想起のアーキテクチャにおける過去・現在・未来——「時間のループ化」を考える
司会 西村拓生(奈良女子大学)

16時30分-17時00分

総括討論 司会 矢野智司(京都大学)

以上のようなプログラムで本年度の日本教育学会近畿支部公開研究会を開催いたします。**参加無料、事前申し込み不要**です。ご参加ください。

<お問い合わせ先>

2013年度日本教育学会近畿支部公開研究会実行委員会

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学教育学研究科 山名淳研究室内

yamana@educ.kyoto-u.ac.jp



報告要旨

第一報告 諏訪清二（兵庫県立松陽高等学校）

防災教育と語り継ぎ

防災教育は、災害から自分の命を守ること（Survivor となるための防災教育）と被災者・地を支援すること（Supporter となるための防災教育）、市民としての「思考力・判断力・表現力」を高めること（市民力を高める防災教育）から成り立っており、学ぶべき分野は、「ハザード」「災害対応」「社会構造」と多岐にわたっている。防災教育の実践には災害の実態から学ぶ姿勢が不可欠であり、そのためには、災害の体験を語り継いでいくシステムが必要となる。

兵庫県立舞子高等学校環境防災科の12年間の実践で行ってきた「語り継ぎ」の作業は次の4点である。①自らの震災体験を記録する「語り継ぐ」を書く、②ユース震災語り部のDVDを作成し、防災授業で活用する、③授業に被災者・支援者を招き体験を聞く、④被災地でボランティア活動を行い、その体験、聞いた話を授業にと入りいれて議論し、作文、冊子にまとめる。

「語り継ぎ」活動は、防災面での社会への貢献という社会的意味と、語る人間と聞く人間の内的変化を引き起こすという人間的意味を持っている。

第二報告 池田華子（天理大学）

方法としての「注意」による「不幸」のケア——「不幸」と災害との繋がりから

本報告は、フランスの思想家シモーヌ・ヴェイユ（Simone Weil, 1909-1943）の思想を手がかりに、教育の立場から災害について考察するものである。

中でも注目したいのは、ヴェイユ独特の術語としての「不幸 le malheure」である。それは、人間が病いや戦争、自然災害をも含めた、謂れなき災禍に見舞われることを含意すると同時に、単なる苦しみとは性質が全く異なるものだと定義されている。

この「不幸」に対する彼女の共感能力は、時に周囲の人々に羨望の念を抱かせるほど驚異的なものであった。しかも、それは家族や友人といった近い人々の「不幸」と同等か、あるいはそれ以上の迫真性を伴って、「遠い他者」の「不幸」へと真っ直ぐに向けられているように見える点で特殊でもある。

本報告では、ヴェイユが「不幸」についての優れた思想家であったことを明らかにすると共に、「不幸」に向き合う彼女が選んだ「注意」という方法と、そこに見出される倫理のありようを描出することを試みたい。

第三報告 小野文生（同志社大学）

水俣病と蘇りの記憶の文化——〈非在のエチカ〉をめぐるいくつかの覚え書き

災害をカタストロフィという意味で広くとらえたとき、その事例として水俣病の経験を取り上げることは、この日本の今にとって、妥当であるだけでなく、ある種の必然性がある。受苦の経験は、忘却と記憶、そして想起の試練のなかで、救済や癒し、再生といったものへの希望や祈りをひとつの思想や文化へ昇華するが、それをここでは蘇りの記憶の文化と規定してみる。すると水俣病の経験が、蘇りの記憶の文化についてのすぐれたアーカイヴを生み出し続けていることがわかる。石牟礼道子の「せめて、悶えてなりと加勢する無力な神」という「悶え加勢」の思想は、当事者の特異な受苦的経験をめぐっていかなる共同性の地平を拓くのか。緒方正人の「チツソはわたしであった」という自覚を転軸点にした「個人に出会う」思想は、『われらはみな、アイヒマンの息子』（ギュンター・アンダーズ）という問題系と共鳴しながら、いかにして加害／被害の対立図式から解放される道すじを描くのか。原田正純が「潜在性水俣病患者」とかつて名づけ、川本輝夫が「うして水俣病」（棄てられていた水俣病）と批判したような、水俣病の「認定」問題は、病の存在、病者の存在、そして災害や受苦の経験を表象し、承認し、我有化することをめぐって、いかなる可能性と不可

能性を突きつけるのか。「存在の現れの政治」(栗原彬)という思想に示唆を承けつつ、さらにわたしは、「あるのではないこと」(非在)が「あること」(存在)と「ないこと」(無)とのいずれにも領有されたり還元されたりしないような闘いの場を切り拓き、「いる／いない」という承認の二項対立的闘争システムを内破する可能性をさぐるために、そしてそのことをとおして、「あるのではないこと」(非在)としてある生がそのまま生きられうるような〈非在のエチカ〉へ接続されていく道を構想したいと考えている。ここでは、その萌芽的なアイデアをいささか乱雑なまま覚え書きとして提示し、批判と助言を仰ぎたい。

第四報告 山名淳(京都大学)

想起のアーキテクチャにおける過去・現在・未来——「時間のループ化」を考える

悲嘆を経験した場所であることが自覚され、そのことを意識して構成された空間を、ここでは想起のアーキテクチャと呼ぶことにする。そのようなアーキテクチャは、文字通り空間の構造であると同時に、過去・現在・未来のつながりに構造を、つまり時間の構造をそのうちに内包している。本報告では、ある思想家による問題提起を引き受けつつ、想起のアーキテクチャにおける時間問題について考究する。

災害の問題との関連でしばしば言及される思想家の一人としてジャン＝ピエール・デュピュイ(Dean=Pierre Dupuy, 1941-)をあげることができる。彼は、もともと科学技術の進展などによって複雑化・高度化する近代システムが人間に災厄をもたらす問題に取り組んでいたが、スマトラ沖を震源とする大震災を契機として2005年に出版された『ツナミの小形而上学』(邦訳は2011年)では、「覚醒した破局」論の射程を自然災害へも広げることができると主張した。デュピュイは、総じて自然災害、道徳的災害、環境災害、産業的災害などを視野に入れたうえで、今日における「悪」の問題を考察しようとしている。

本報告では、ドイツの哲学者ギュンター・アンダースによるノアの寓意をデュピュイがとりあげて論究している箇所に注目する。デュピュイは、偶然と運命とを混交させるような「時間のループ化」こそ、ノアの予言が人びとの「信念の体系」へと染み入ることを可能にし、また彼らを行動へと促すことができた要因であったと考える。「時間のループ化」とは何であるかを明らかにした後に、そこから翻って災害ミュージアムを含む想起のアーキテクチャへの示唆を見出したい。